

## 第4節 堂床遺跡の位置づけ

堂床遺跡は明らかに玉生産を目的として形成された集落である。このことは堂床遺跡の出土遺物に農具等の基本的な生産道具が欠如していることや、玉作工房の割合が高いことからもわかる。ここでは出雲地域の各玉生産遺跡との比較を行うことにより、玉生産を行う為に形成された堂床遺跡がどのように位置づけられるかを考える。

現在、出雲地域で確認されている玉生産遺跡は表採資料で確認されたものも含めると72ヶ所にも及ぶ。第8表<sup>28</sup>はそれらの内で発掘調査が実施された古墳時代後期までの玉生産遺跡をまとめたものである。出雲地域での玉生産は今のところ弥生時代前期まで遡る。この時期の西川津遺跡では玉材に緑色凝灰岩を使用して管玉を生産しており、続く弥生時代中期には布田遺跡で、やはり緑色凝灰岩を使用して管玉を生産している。この緑色凝灰岩は古墳時代の玉生産にはあまり使用されない石材である。またこの2遺跡では管玉の製作に捺切分割を特徴とする古墳時代の管玉製作にはみられない製作技法を使用している。この時期の卡生産は卡材、製作技法とともに古墳時代の卡生産とは直接には繋がらないものと言える。古墳時代の出雲玉作の特徴の一つは、水晶と碧玉を玉材として使用する点にある。水晶の最も古い出土例は弥生時代中期の古志本郷遺跡で、碧玉の最も古い出土例は弥生時代後期の竹ヶ崎遺跡である。花仙山周辺地域の最も古い玉生産遺跡は、弥生時代終末期の史跡出雲玉作跡宮ノ上地区であるが、この地で卡生産が行われるようになるのは碧玉が卡材として使用されるようになったことが原因と考えられる。

古墳時代前期の玉生産遺跡の調査例は少なく史跡出雲玉作跡宮垣地区しかないが、古墳時代中期前半と中頃には安来市、東山町、大東町といった花仙山周辺以外の地域でも玉生産遺跡が確認されるようになる。しかしこれらの地域の卡生産遺跡は同時期の花仙山周辺地域の人角山遺跡と比較すると、玉作工房の数も未成品の川上数も少なく小規模であることは否めない。

続く堂床1期には人原遺跡（安来市）、柳II遺跡（安来市）、平ラII遺跡（安来市）、忌部中島遺跡（松江市）、福富I遺跡（松江市）といった卡生産遺跡がある。このうち確実に規模が大きいと言えるものは大原遺跡と福富I遺跡である。特に人原遺跡は花仙山周辺地域以外の玉生産遺跡では最も未成品の川上数の多い遺跡であり、この時期の出雲東部に、花仙山周辺地域に勝とも劣らない玉生産遺跡が存在したことは特筆すべきであろう。

以上、堂床遺跡で玉生産が行われる以前の山雲地域の状況について簡単に述べてきた。基本的に花仙山周辺地域は継続して規模の大きい玉生産遺跡が存在した場所であることがわかった。堂床遺跡も規模の大きさという点ではこの流れに位置づけられるものであろう。ただし人角山遺跡や福富I遺跡と比較すると同じく花仙山周辺地域の大規模な玉生産遺跡とは言え生産状況はやや異なる。人角山遺跡は碧玉と瑪瑙に偏重した生産状況であり、福富I遺跡は碧玉に偏重した生産状況である。場所は違えども大原遺跡もまた碧玉と瑪瑙に偏重した生産状況を示している。堂床遺跡はこれらの大規模な生産集落と異なり各玉材をバランス良く使用する生産状況を示している。また、3時期にまたがり継続して玉生産を行う点でも他の遺跡と異なる（2時期にまたがり継続するものには人原遺跡がある。また、史跡出雲玉作跡が数時期にまたがっている可能性は十分考えられる）。史跡出雲玉作跡の詳細が不明な時点での推論は危ういが、少なくとも、堂床2期以前の詳細の判明している大規模な玉生産遺跡とは一線を画する位置にあることは確かである。

次に同時期の玉生産遺跡と比較したい。堂床遺跡が玉生産を行った期間の出土未成品の数がわかる玉生産遺跡は、堂床2期に於ける史跡出雲玉作跡宮垣地区しかない。まず未成品の出土数を比較すると、史跡出雲玉作跡宮垣地区では1,500点以上のものに対して堂床遺跡では850点を数えるのみであることがわかる。しかも史跡出雲玉作跡宮垣地区の1,500点以上という数は玉作工房跡のうち1棟のみから出土した数である。史跡出雲玉作跡宮垣地区は堂床遺跡を遙かに凌駕する大玉生産集落遺跡であることは確かであろう。また、堂床遺跡の玉作工房跡は工作用ピットを備えていないが、史跡出雲玉作跡宮垣地区では、紹介されている3つの工房跡は全て工作用ピットを備えている。その他に史跡出雲玉作跡宮垣地区は花仙山山麓に位置するが、堂床遺跡は玉湯川を挟んで花仙山山麓から約14km離れた場所にある。これらの違いから堂床遺跡と史跡出雲玉作跡宮垣地区では遺跡の性格がかなり異なることがわかる。堂床3期以降には詳細な内容が解る遺跡が堂床遺跡の他に無いため比較検討が行えないが、堂床2期の状況から考えると、やはり、史跡出雲玉作跡では堂床遺跡と比較にならない規模の玉生産を行っていたものと思われる。以上のことから堂床遺跡はそれ以前の遺跡と比べると一線を画するものの、同時代的には決して大規模な遺跡として位置づけることはできないことがわかる。

この場合、問題となるのは堂床遺跡と史跡出雲玉作跡との関係である。①同じ生産組織に属し、堂床遺跡は補助的な生産を行う、②同じ生産組織に属すが、それぞれ独自に玉生産を行い製品の流通対象も異なる、③異なる生産組織に属すが、堂床遺跡は補助的な生産を行う、④異なる生産組織に属し、それぞれ独自に玉生産を行い製品の流通対象も異なる、という4つのケースが考えられる。これらのケースは時期によって変化することも十分考えられる。この問題を解決するためには史跡出雲玉作跡の生産状況の把握が必要である。また、それぞれの遺跡で製作した未成品の区別が付く場合は流通に関しての問題を解決することは可能であろう。いずれにせよ史跡出雲玉作跡の詳細が不明である時点での判断はできない。

### 結語

以上、堂床遺跡の基本的な部分について論じてきた。最後に玉生産研究の問題点と展望について述べたい。古墳時代の玉生産における重要な課題に「部」の問題がある。この問題を解決する為には2つの基礎的な研究が重要となる。1つは製作工程や生産遺跡についての研究であり、もう1つは生産地から消費地への流通についての研究である。現在の玉生産研究は前者に偏重している觀がある。製作技法の共通する遺跡や異なる遺跡の相互の関係を研究する一方で、特定の技法や石材の分布から流通を推定することが必要であると考える。

第8表 島根県の主要玉生産遺跡地名表

遺跡名	所在地	時期	遺構名	遺構の形態	工作用ピット	焼土面
西川津遺跡	松江市西川津町	弥生時代前期	包含層			
布田遺跡	松江市竹矢町	弥生時代中期	包含層			
古志木郷遺跡	出雲市古志町	弥生時代中期	SIO1	円筒の堅穴住居	?	無し
			SIO2	圓柱方形の堅穴住居	?	無し
竹ヶ崎遺跡	安来市荒島町	弥生時代後期	加工段07	加工段	無し	?
			SII1	?	無し	無し
			SII3	不整円形の堅穴住居	無し	?
			SII5	扇形六角形の堅穴住居	無し	無し
平所遺跡	松江市竹矢町	弥生時代後期	未作工房場	圓柱方形の堅穴住居	有り	有り
史跡出雲玉作跡宮ノ上地区	玉湯町玉造	弥生時代終末期	包含層			
史跡出雲玉作跡宮ノ下地区	玉湯町玉造	4C代	71GⅡ号址	圓柱方形の堅穴住居	有り	有り
勝負遺跡	東出雲町猪屋	5C前半	SIO7	方型の油工段	有り	有り
大角山遺跡	松江市乃木福富町	5C前半	SIO1	方型の堅穴住居	有り	有り
			SIO4	?	?	有り
			SIO5	方型の加工段	?	有り
			SXO1	加工段か?	?	?
			SXO2	加工段か?	?	?
大東高校校庭遺跡	大東町大原	5C前半	包含層			
大原遺跡	安来市佐久保町	5C中頃	SIO1	方型の堅穴住居	有り	有り
原ノ前遺跡	東出雲町猪屋	5C中頃	加工段02	加工段	?	?
			加工段03	加工段	?	?
四ツ脚Ⅰ遺跡	東出雲町猪屋	5C中頃	SIO1	方型の加工段	有り?	無し
			SBO1	加工段	?	?
大原遺跡	安来市佐久保町	堂床1期	SIO2	方型の堅穴住居	有り	無し
柳Ⅱ遺跡	安来市荒島町	堂床1期	SBO8	加工段	無し	無し
			SK15	土坑	無し	無し
平ラⅡ遺跡	安来市吉佐町	堂床1期	SIO1	方型の加工段	有り	有り
			SIO2	加工段	?	有り
			SIO3	加工段	?	有り
忍足中島遺跡	松江市東足利町	堂床1期	第1号址	方型の堅穴住居	有り	有り
猪宮1遺跡	松江市乃木福富町	堂床1期	SBO1	加工段	?	?
			SBO2	方型の加工段	?	?
			加工段1	加工段	無し	無し
			加工段2	加工段	無し	無し
			加工段3	加工段	無し	無し
			加工段4	加工段	無し	無し
			加工段5	加工段	無し	無し
史跡出雲玉作跡宮垣地区	玉湯町玉造	堂床2期	69AⅠ号址		有り	?
			69BⅡ号址		有り	?
			71BⅠ号址		有り	?
史跡出雲玉作跡宮ノ上地区	玉湯町玉造	堂床3期	包含層			

第9表 玉生産遺跡の未成品出土数

時期	遺跡名	緑色凝灰岩	水晶	碧玉	瑪瑙	滑石、綠泥片岩	未成品の 总数
		未成品剥片	未成品剥片	未成品剥片	未成品剥片	未成品剥片	
弥生時代前期	西川津遺跡	○ ○					不明
弥生時代中期	布田遺跡	○ ○	○				不明
弥生時代中期	古志木郷遺跡	3 ○	1	○			4
弥生時代後期	竹ヶ崎遺跡	○	1 ○	○			1
弥生時代後期	平所遺跡		○ ○ ○ ○ ○ ○				不明
弥生時代後期	史跡出雲玉作跡宮ノ上地区	○ ○ ○ ○ ○ ○					不明
4C代		○ ○	150	○	○		150以上
5C前半	勝負遺跡		19 ○	1 ○	15		35
5C前半	大角山遺跡	3 ○	63 ○	141 ○			207
5C前半	大東高校校庭遺跡		○ ○	48 ○	8 ○	4	60
5C中頃	大原遺跡		15 ○	3 ○	14 ○		32
5C中頃	原ノ前遺跡		○ ○	1 ○	3 ○		4
5C中頃	四ツ脚Ⅰ遺跡		3 ○	5 ○	9		17
5C後半	大原遺跡		88 ○	6 ○	1 ○		95
5C後半	柳Ⅱ遺跡	1	2				3
5C後半	平ラⅡ遺跡		○ ○	2 ○	○ ○		2
5C後半	尼部中島遺跡	○ ○	4 ○	8 ○	10 ○	22以上	
5C後半	猪富Ⅰ遺跡	22 ○	94 ○	11 ○	10 ○		137
6C前半	史跡出雲玉作跡宮垣地区	○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		1500以上
6C前半	堂床遺跡	143 ○	83 ○	39 ○	585 ○		850
6C後半	史跡出雲玉作跡宮ノ上地区	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		200以上
6C後半	堂床遺跡	188 ○	139 ○	90 ○	210 ○		627
7C前半	堂床遺跡	45 ○	50 ○	17 ○	48 ○		160

注

- (1) 大谷晃二 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会 1994
- (2) 大谷は注(1)文献の中で口縁部を  $\alpha$  1類～ $\alpha$  5類、 $\beta$ 類、 $\gamma$  1類～ $\gamma$  3類に分類した。
- (3) 島根県教育委員会 「門生黒谷I遺跡」「門生黒谷II遺跡」「門生黒谷III遺跡」一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 1998
- (4) 松江市教育委員会 「池ノ奥窓跡群」「松江東工業団地内発掘調査報告書」第II巻 1990
- (5) 松江市教育委員会 『出雲国庁跡発掘調査概報』 1970
- (6) 浜田耕作、島田貞彦、梅原未治 『出雲上代玉作遺物の研究』京都帝國大學大学文学部考古學研究報告第10冊 1927
- (7) 原田大六 『滑石製品』『沖ノ島』宗像神社沖津宮祭祀遺跡 1958
- (8) 寺村光晴 『古代玉作の研究』国学院大学考古学研究報告 第3冊 1966
- (9) 松本岩雄 「平所遺跡1」「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」I 島根県教育委員会 1976
- (10) 柳浦俊一 「福富I遺跡」「福富II遺跡」「屋形1号墳」一般国道9号（松江道路西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2 1997
- (11) 高橋進一は1988年島根考古学会3月例会で水晶製平玉における敲打について口頭発表を行っている。
- (12) 寺村は注(8)の文献で後原技法と中島技法とオガクチ技法を設定している。後原技法とは側面打製調整時に勾玉腹部の抉りを製作するもので、中島技法とは側面打製調整で半円形に整形した未成品に一旦研磨を施しその後に勾玉腹部の抉りを打撃により製作するもので、オガクチ技法とは側面打製調整で半円形に整形した未成品に研磨を施し半円形の研磨未成品にしてその後に勾玉腹部の抉りを研磨により製作するものである。技法の名称はそれぞれの技法が確認された島根県後原遺跡、島根県忌部中島遺跡、新潟県オガクチ遺跡による。堂床遺跡では寺村の分類に従えば後原技法とオガクチ技法に当たる未成品は出土している。しかし後原遺跡（古墳時代前期）とは時期的な隔たりがあり、オガクチ遺跡とは地理的な隔たりと玉材（オガクチ技法では蛇文岩質と滑石を使用）に隔たりがある。尚、オガクチ技法に近いものが勾玉D字工程であり、中島技法に近いものが勾玉C字工程である。
- (13) 原田の設定した滑石製白玉・平玉製作工程では穿孔段階を形割の前に設定しており、当遺跡の緑色凝灰岩製白玉製作工程と穿孔の順番が異なる。しかし『冲の島』に掲載されている滑石製白玉・平玉（第77図）には施溝された溝内に穿孔されたものが幾つかある。従って、当遺跡の緑色凝灰岩製白玉製作工程と同じく形割後に穿孔されたものもあると考えられる。
- (14) 米田克彦「出雲における古墳時代の玉生産」『島根考古学会誌』第15集 島根考古学会 1998  
米田は碧玉製勾玉と瑪瑙製勾玉の側面打製工程品と一次研磨品（本書で言う荒作りと荒磨きの未完成品）のC字形と半月形（本書で言うC字工程とD字工程）の分布を調べ碧玉製勾玉には明確な地域差が存在することを示した。その分布は安来地域はC字形、東出雲地域はC字形と半月形、花仙山周辺地域は半月型、大東地域はD字形というものである（瑪瑙製勾玉は碧玉ほど顕著な地域差が現れなかった）。その結果から「このように地域によって製作技術が異なるこ

とは、玉作集団が異なることを示しているのと同時に、玉作集団がそれまでの地域を越えて移動して別の地域で新たに玉生産を行うことはなかったことを示していると考えられる」と述べている。

- (5) 第8表は注(4)の文献を参考にしつつ各遺跡の報告書に基づいて製作したものである。使用した報告書は以下のとおりである。尚、この表では滑石と緑泥片岩と頁岩を広義の滑石として扱っている。

西川津遺跡：島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書V（海崎地区3）』1988

布田遺跡：島根県教育委員会『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書W（布田遺跡）』1991

古志本郷遺跡：出雲市教育委員会『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第4集 1994

竹ヶ崎遺跡：島根県教育委員会『竹ヶ崎遺跡』『塩津丘陵遺跡群』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区IX 1998

平所遺跡：注(9)文献と同じ

史跡出雲玉作跡宮ノ上地区：玉湯町教育委員会『史跡出雲玉作跡一宮ノ上地区 第1次発掘調査概報』1984

玉湯町教育委員会『史跡出雲玉作跡一宮ノ上地区 第2次発掘調査概報』1985

史跡出雲玉作跡宮垣地区：玉湯町教育委員会『史跡山雲玉作跡発掘調査概報』1972

勝負遺跡：島根県教育委員会『勝負遺跡』『勝負遺跡・堂床遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区10 1998

大角山遺跡：島根県教育委員会『島根県消防学校建設に伴う大角山遺跡発掘調査報告書』

1988

角田徳幸・米田克彦「島根県松江市大角山遺跡の再検討」『島根考古学会誌』第16集 島根考古学会 1999

大東高校グラウンド遺跡：大東町教育委員会『大東高校グラウンド遺跡』『大東高校校地拡張に伴う発掘調査報告 角田遺跡・又下遺跡 付 大東高校グラウンド遺跡他資料』1988

大原遺跡：島根県教育委員会『大原遺跡』『臼コクリ遺跡・大原遺跡』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 V 1994

原ノ前遺跡：島根県教育委員会『原ノ前遺跡』『淡山池遺跡・原ノ前遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区VII 1997

四ツ廻II遺跡：島根県教育委員会『四ツ廻II遺跡』『四ツ廻II遺跡・林廻り遺跡・受馬遺跡』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区III 1996

柳II遺跡：島根県教育委員会『柳II遺跡』『柳II遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区IV 1996

平ラII遺跡：島根県教育委員会『平ラII遺跡』『平ラII遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群』

一般国道9号（安米道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 10 1995  
忌部山島遺跡：大場磐雄・寺村光晴「山雲国忌部の玉作工房と出雲玉作」『日本考古学協会昭和39年度大会研究発表要旨』日本考古学協会 1966  
注（14文献）

福富I遺跡：注文献

#### 参考文献

- 山本 清 「島根大学敷地薬師山古墳遺物について」『島根大学論集（人文科学）』第5号 1955  
山本 清 「山陰の須恵器」『島根大学論集（人文科学）』第9号 1959  
門脇俊彦 「西山陰における横穴墓の受容（上）」『島根考古学会誌』第3集 1985  
足立克己・丹羽野裕 「高広遺跡発掘調査報告書」島根県教育委員会 1984  
島根県教育委員会 「玉作関係遺跡」島根県牛産遺跡分布調査報告書IV 1987  
閑川尚功 「古墳時代における畿内の玉生産」『木永先生米寿記念献呈論文集』 1985  
河村好光 「攻玉技術の革新と出雲玉つくり」『島根考古学会誌』第9集 1992  
水野 祐 「出雲国風土記論攷」日本古代研究史叢刊第2冊 1965  
片岡詩子 「蛇喰遺跡」玉湯町教育委員会 1999

# 写 真 図 版

## 凡 例

遺物写真の番号（○-□）は、本文中の挿図番号（第○図□）に対応する。

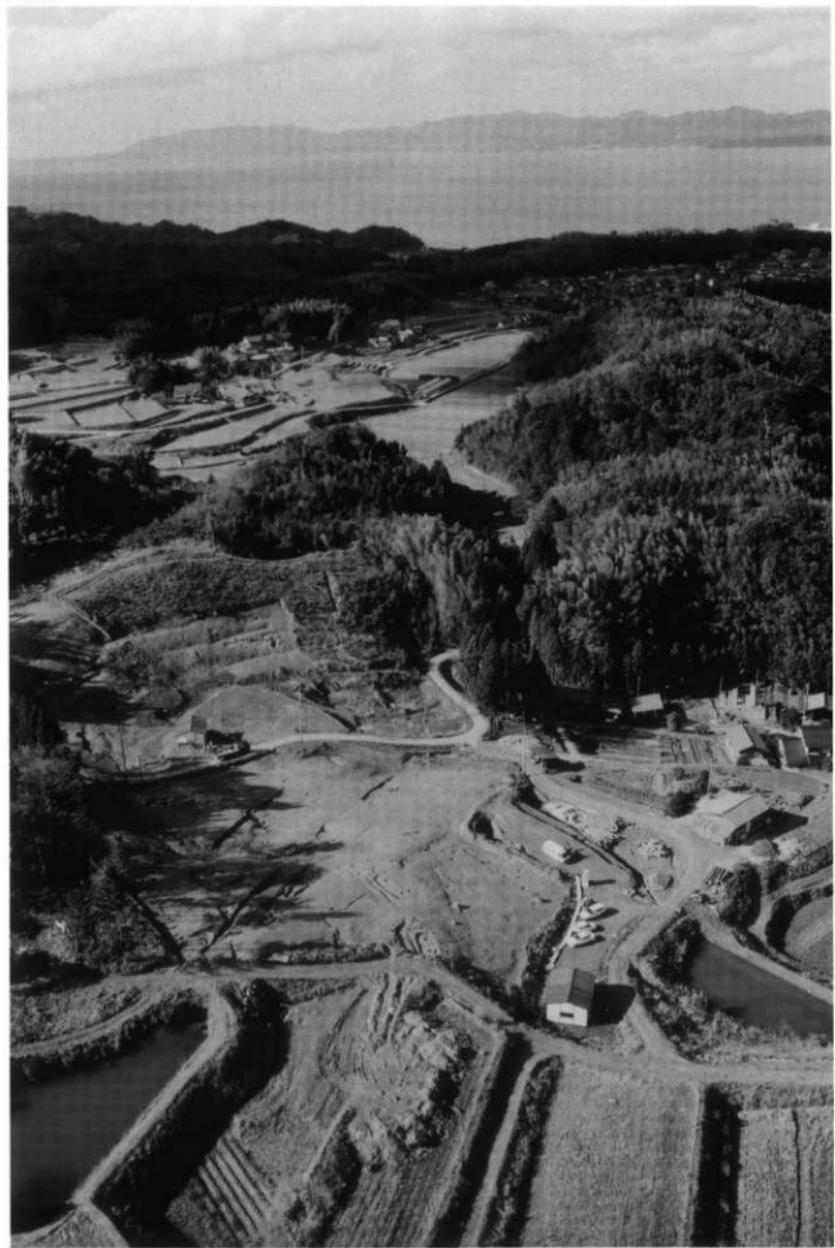
番号のみのものは、観察表の整理番号に対応する。

また、フレイク・チップには、挿図番号・整理番号共に存在しない。

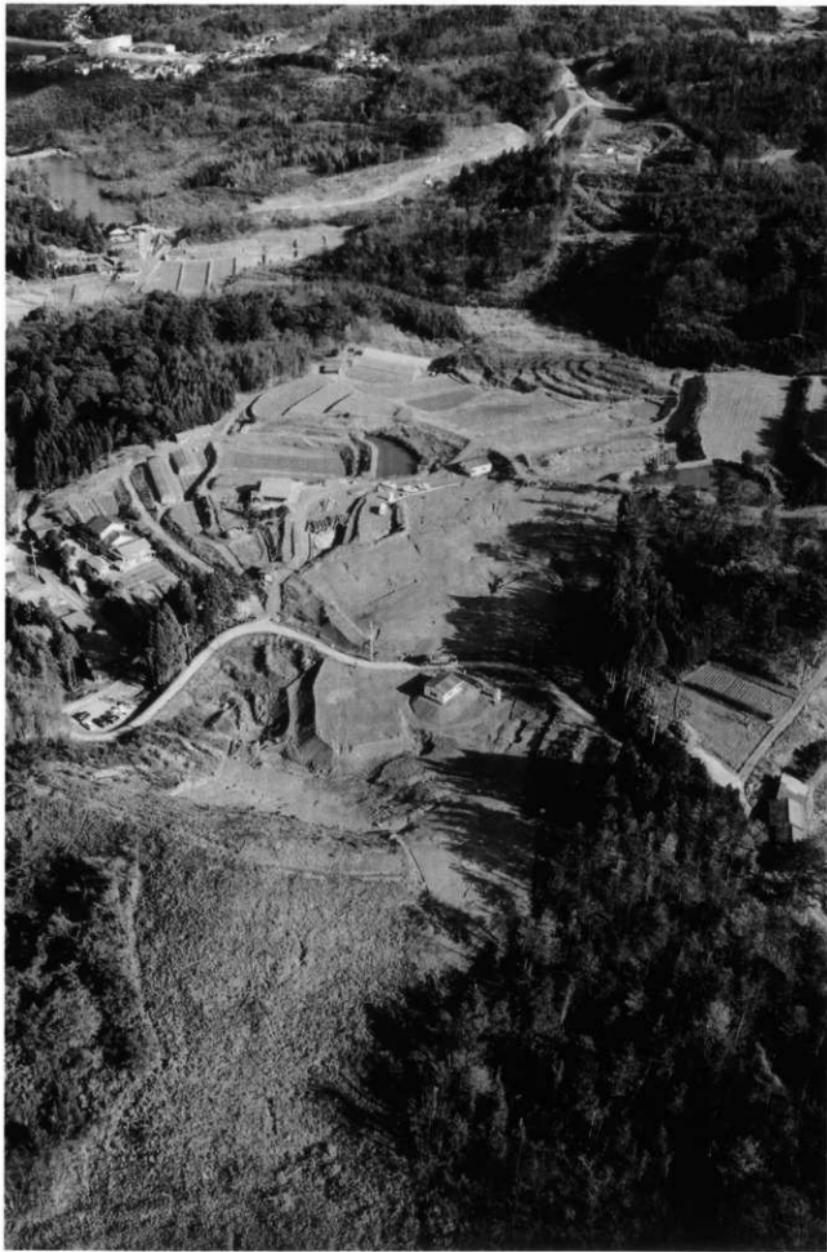




堂床遺跡全景



堂床遺跡上空から北方を望む 向こうは宍道湖



堂床遺跡上空から東方を望む 向こうは玉造温泉街

図版 4



調査前の堂床遺跡（西区）



調査前の堂床遺跡（東区）



S X01 完掘状况



S X01 土層

図版 6



S B01 燃土検出状況



S B 01 完掘状況

図版 8



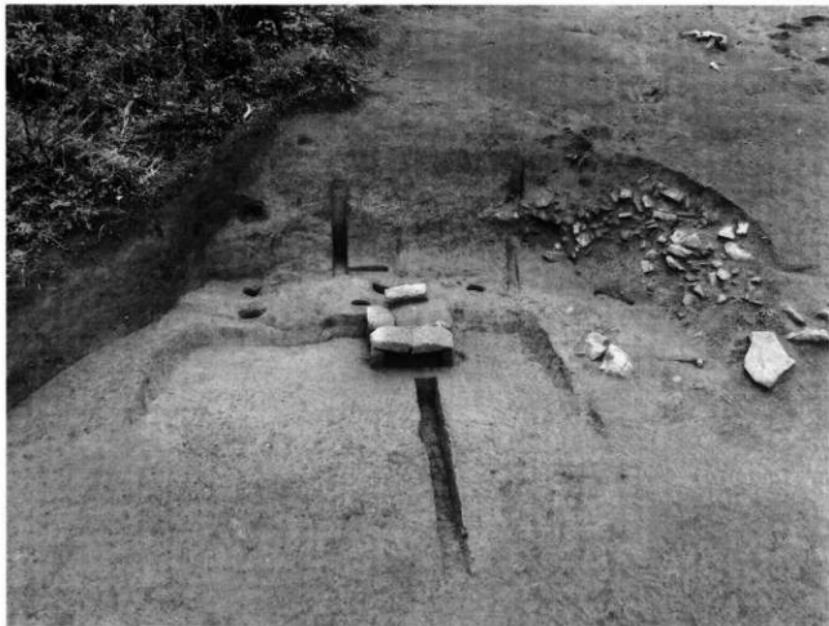
S B 01  
焼土 1 土層



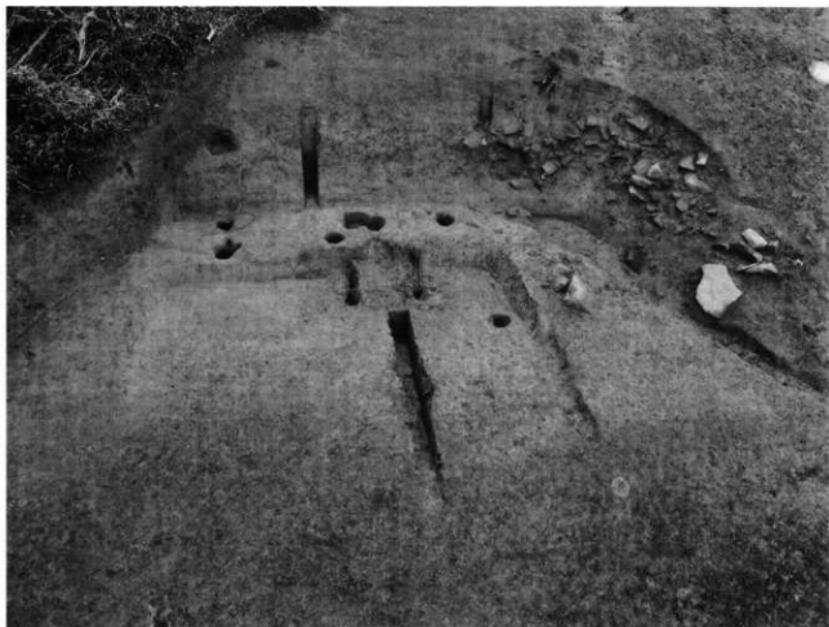
S B 01  
焼土 2 土層



S B 01  
焼土 3 土層



S B 05 加工段と暖炉状遺構



S B 05 完墳状況

図版10



S B 05  
暖炉状造構  
正面



S B 05  
暖炉状造構  
左側面



S B 05  
暖炉状造構  
右側面



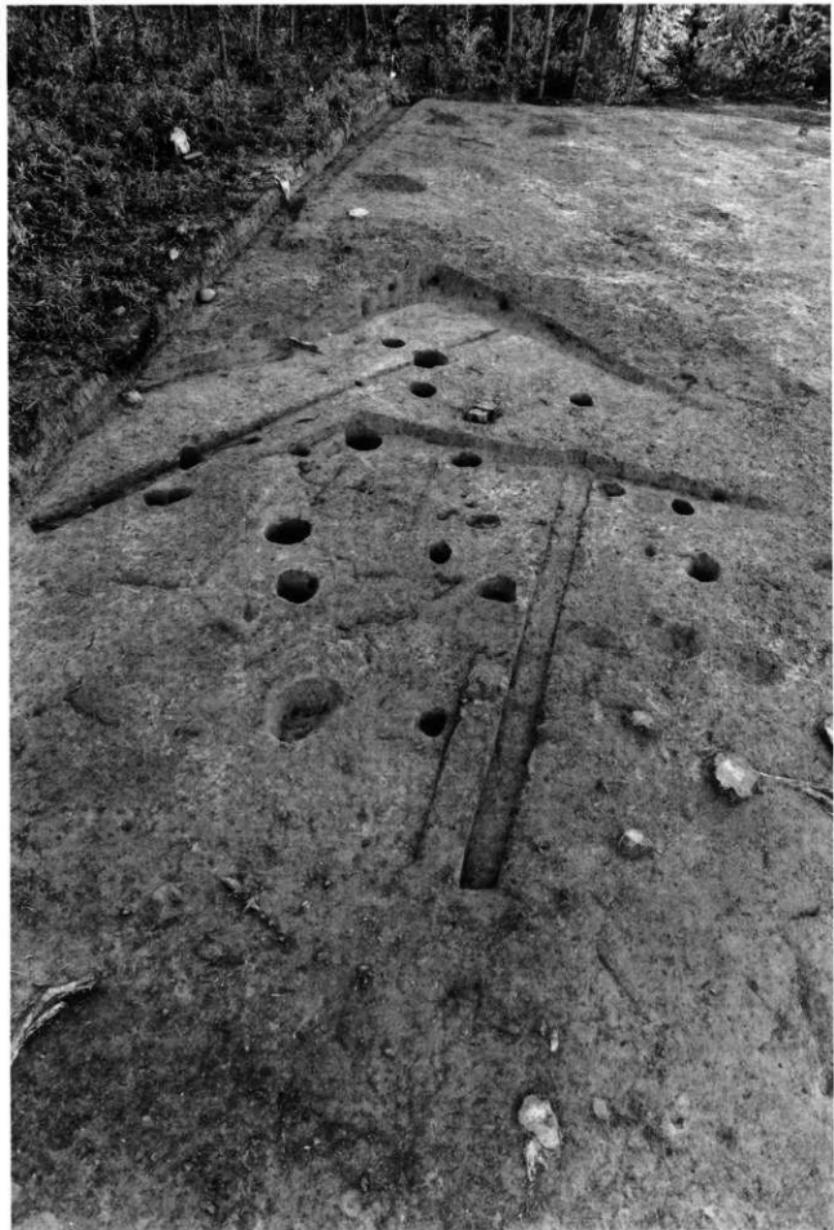
S B 05  
暖炉状造構  
煙道検出状況



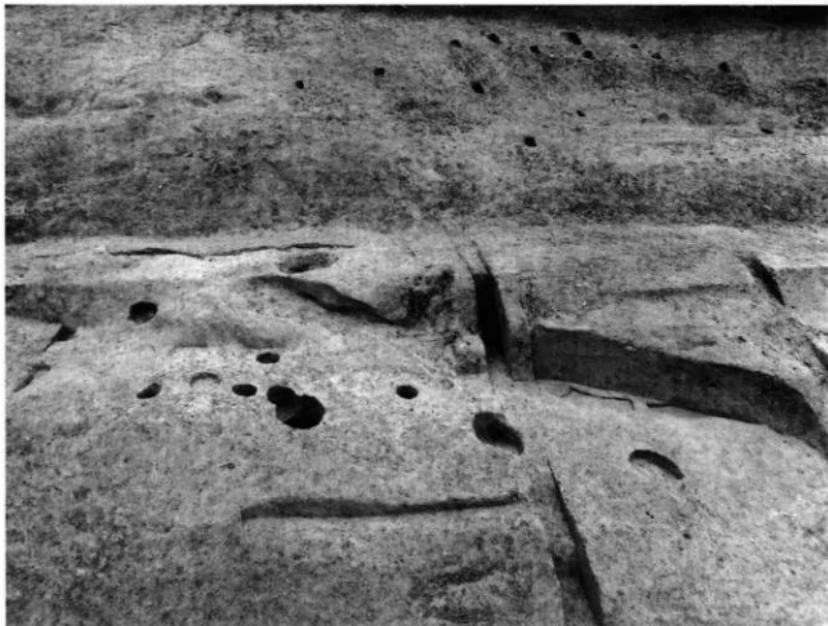
S B 05  
暖炉状造構  
甑出土状況



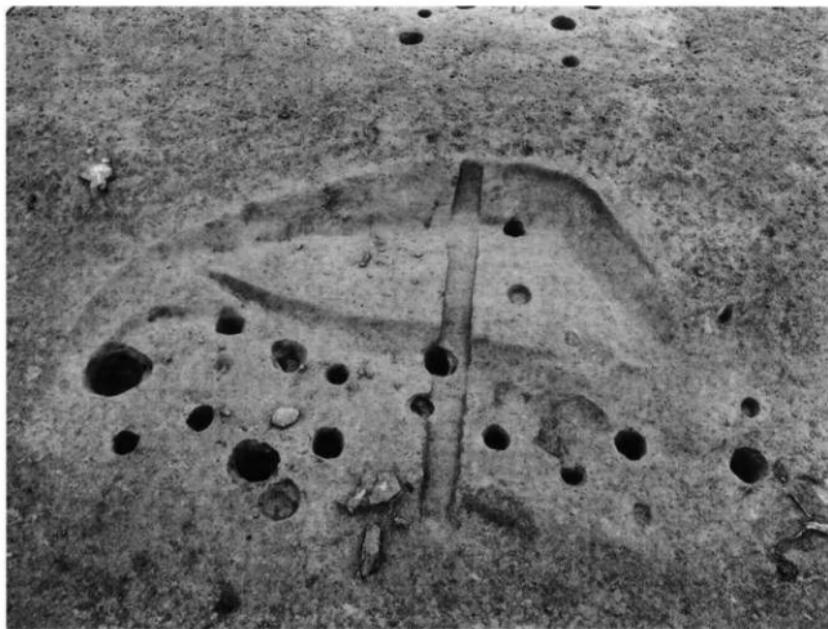
S B 05  
暖炉状造構  
焼土と炭化物



S B 06 · S B 07 宠掘状况



SB02・SB03・SB04 完掘状况



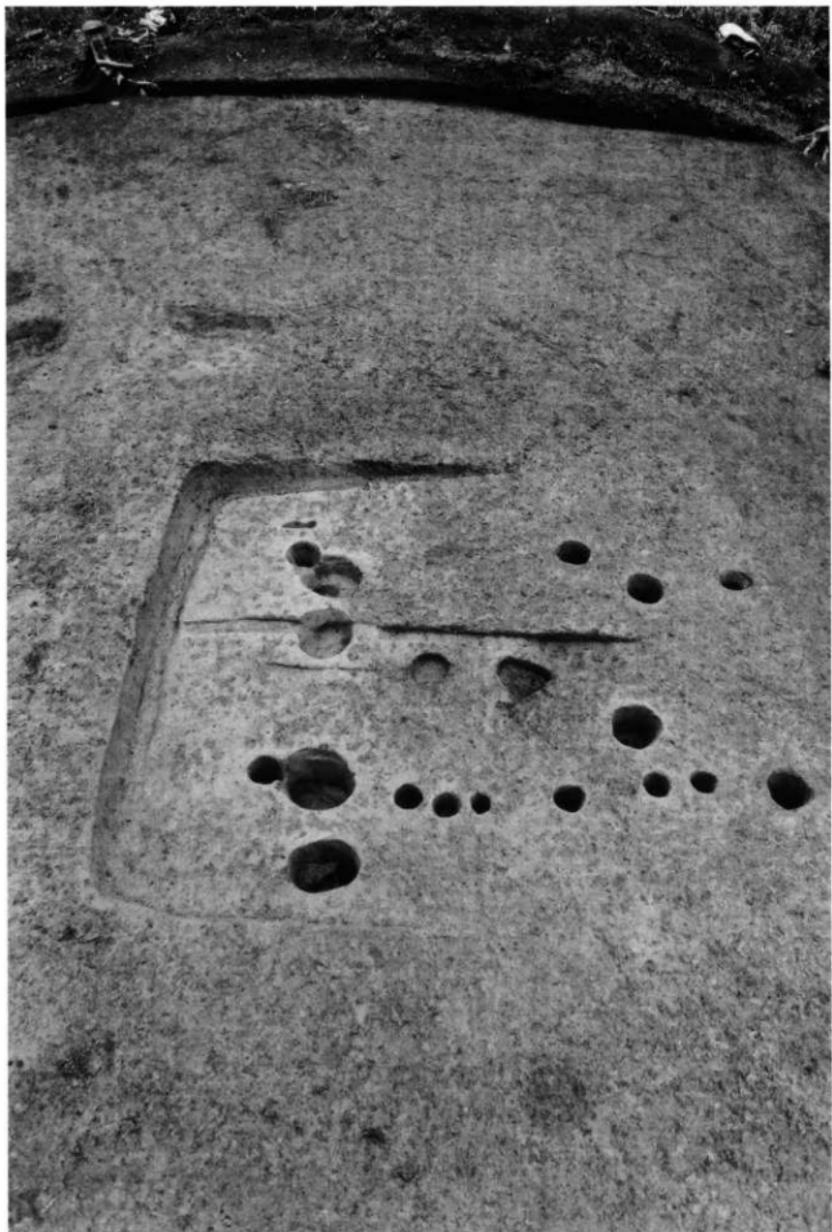
SB08・SB09 完掘状况



S B10  
完掘状況



S B11  
完掘状況



S B12 完掘状況



S B13 完掘状况



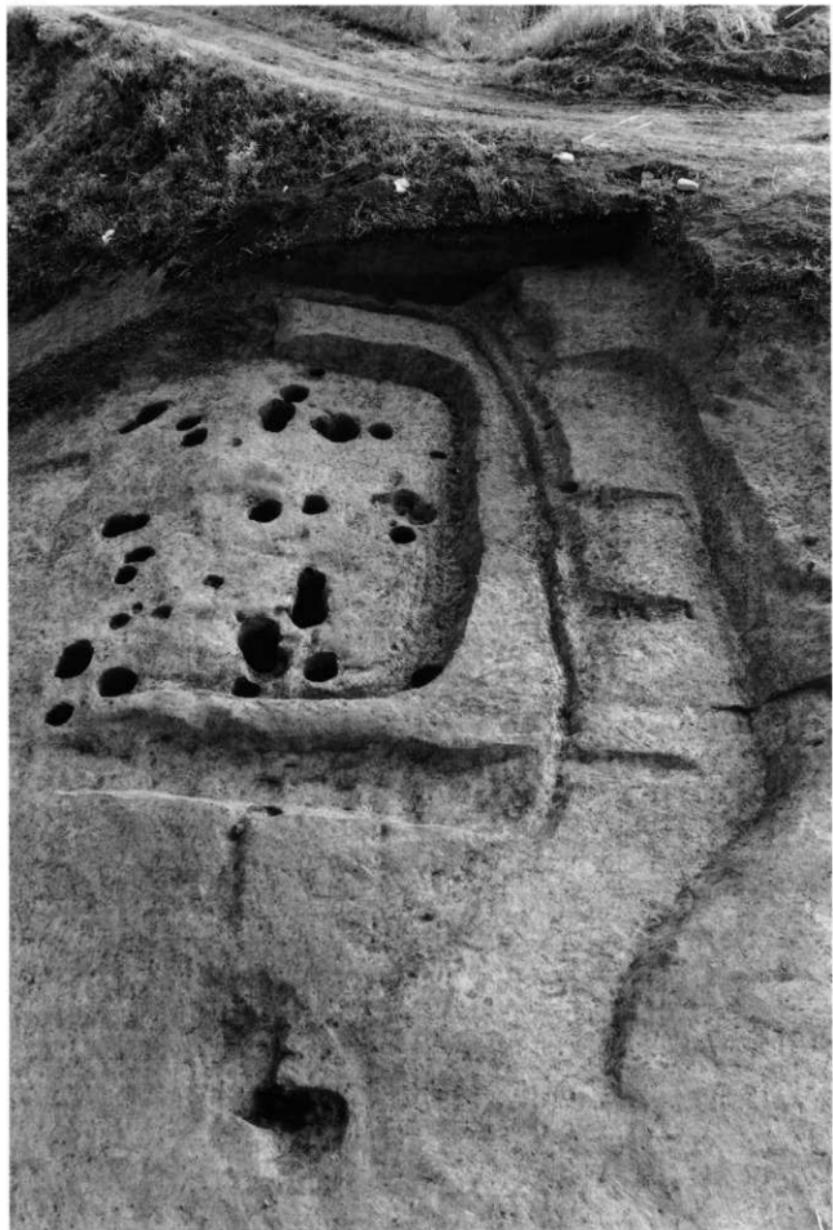
S B14 完掘状况



S B15・S B16 完掘状況



S B15・S B16 土層



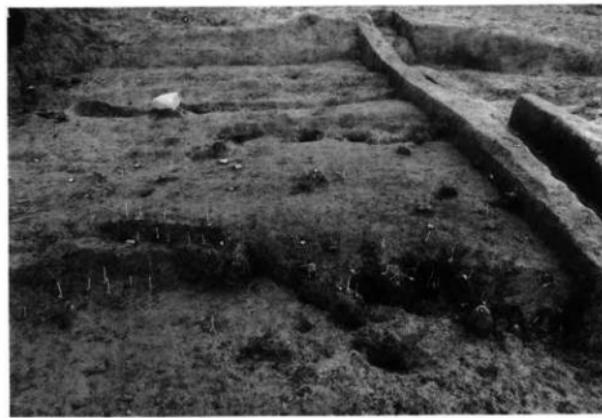
S B18 · S B19 · S B20 完掘状况



図版20



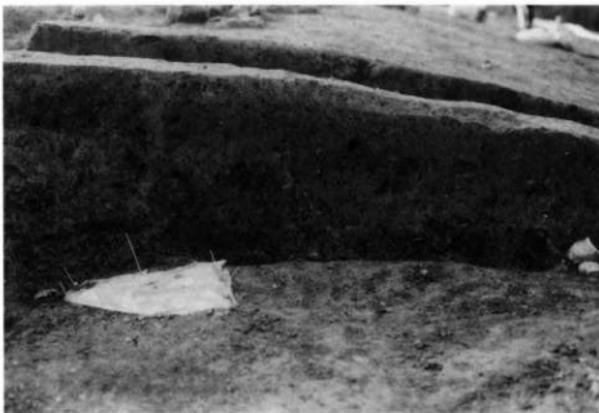
S B 18  
玉類出土状況



S B 18  
玉類出土状況



SB18・SB19・SB20  
土層その1



SB18・SB19・SB20  
土層その2



SB18・SB19・SB20  
土層その3

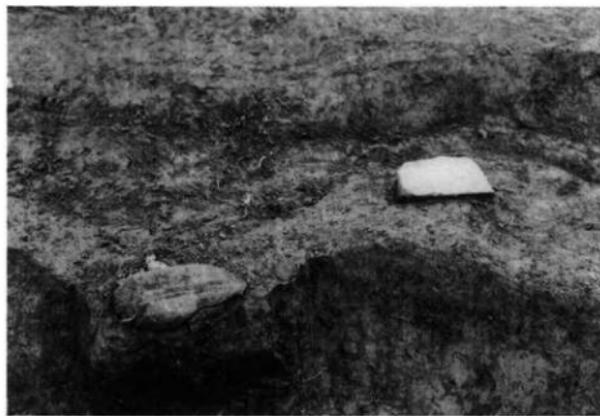
图版22



S B18  
遗物出土状况



S B18  
遗物出土状况



S B18  
砾石出土状况



SB21・SB22・SB56 完掘状況



S B21・S B22 土層



S B23・S B50・S B51 完掘状況



S B 24 遺物出土状況



S B24～S B27・S B53・S B54 完掘状況

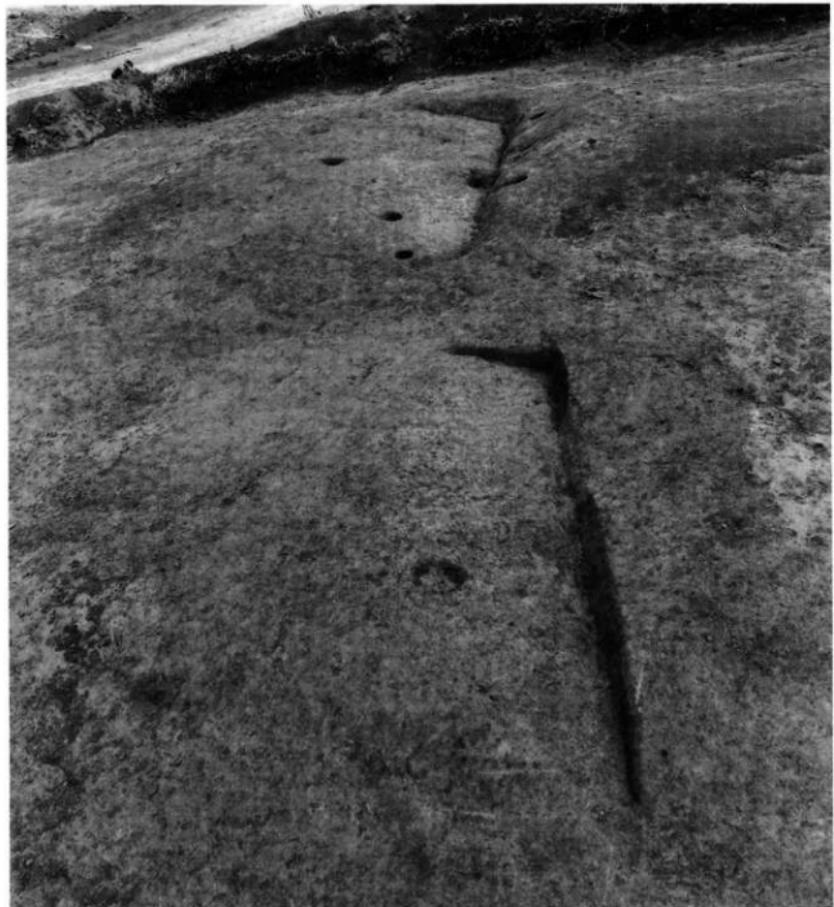


S B24～S B27・S B53・S B54 土層C



SB31 完掘状況

圖版28



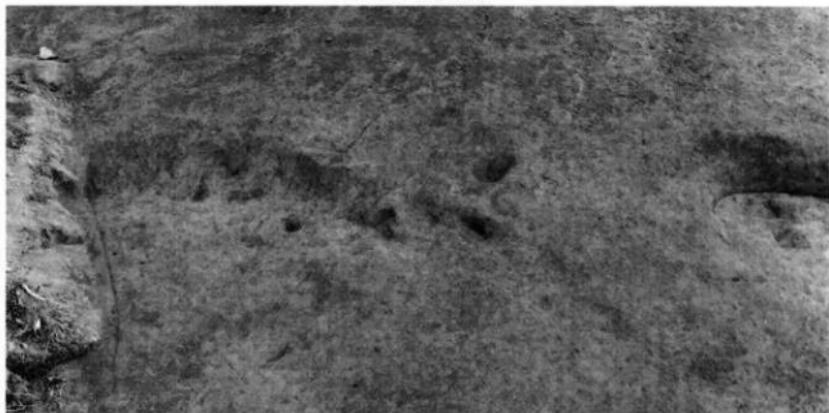
S B 28 完掘状况



S B 29 完掘状况



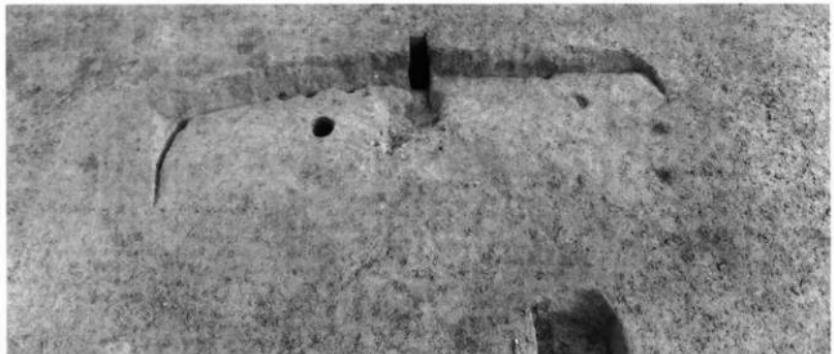
S B 26 完掘状况



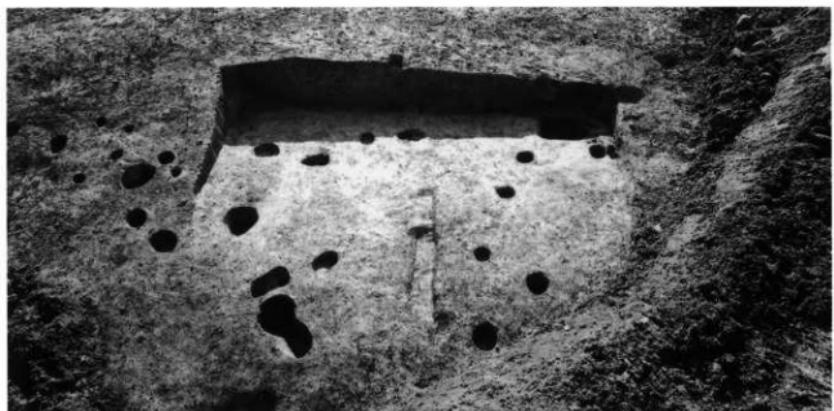
S B 30 完掘状况



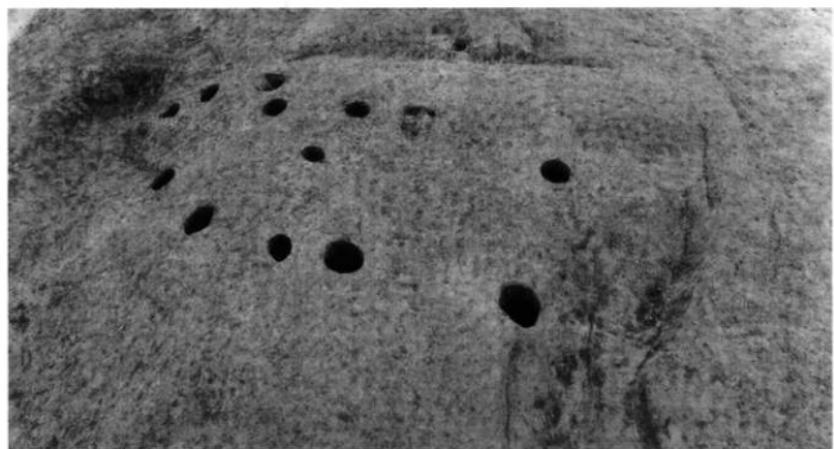
S B 33・S B 34 完掘状况



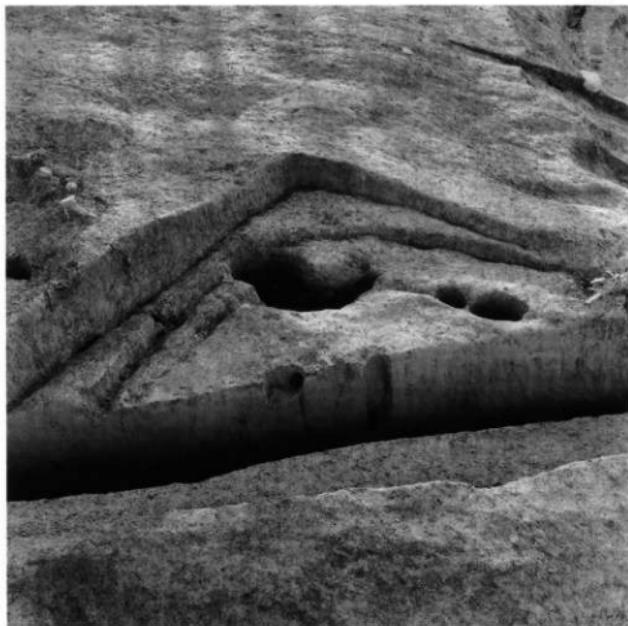
S B 32 完掘状況



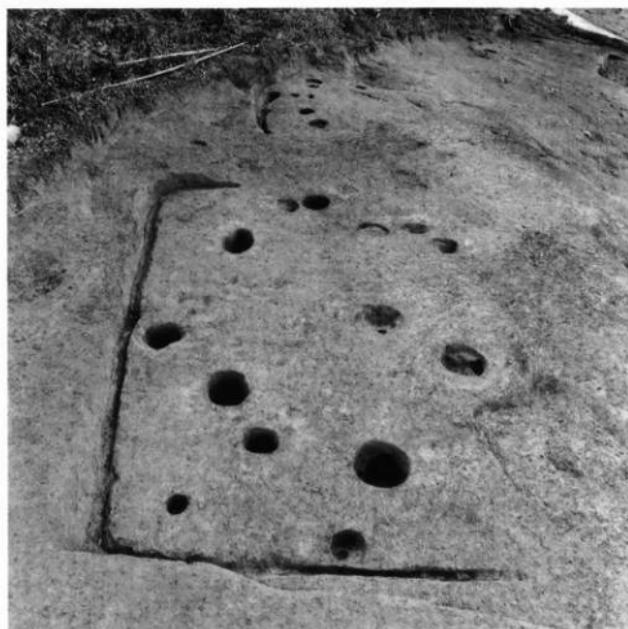
S B 35 完掘状況



S B 36 完掘状況



SB 38・SB 39・SB 40  
完掘状況



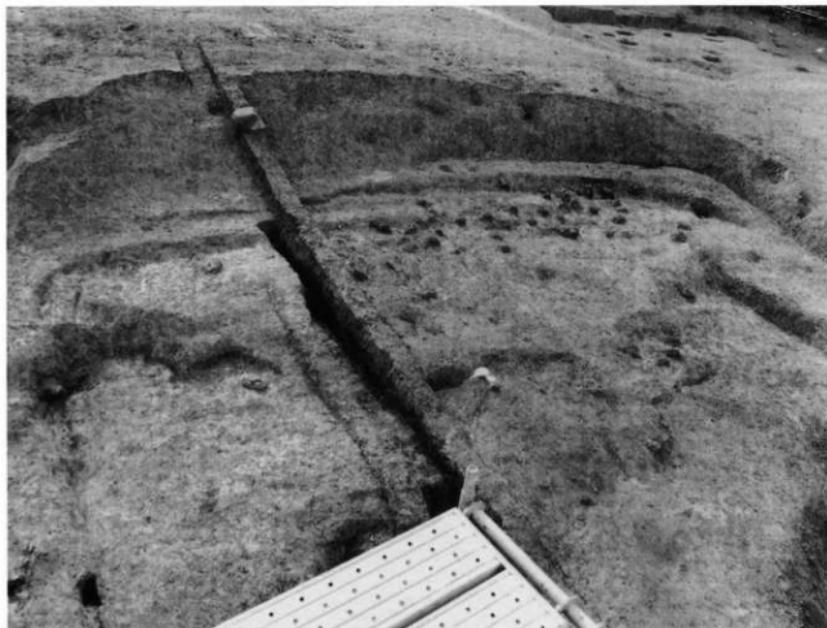
SB 41  
完掘状況



S B 43～S B 49 完掘状況



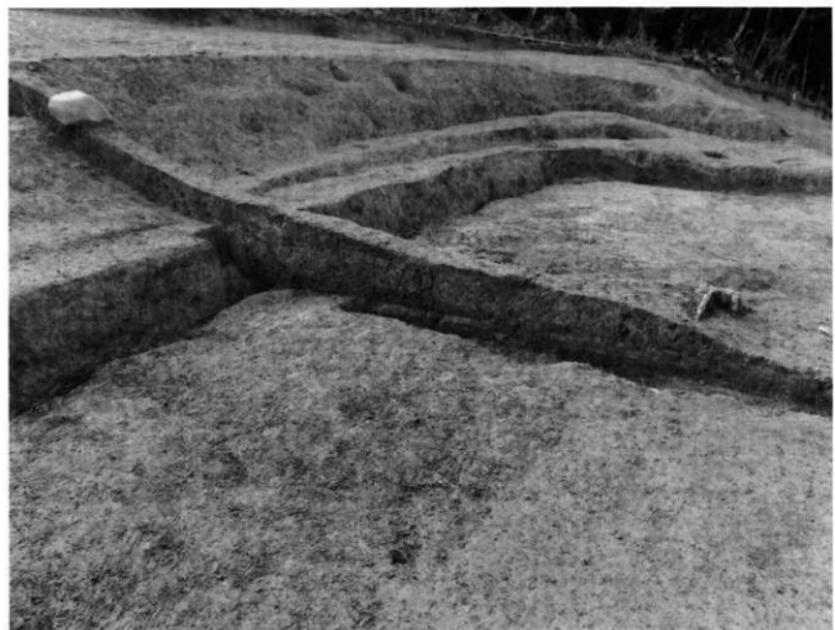
SB 43・SB 44・SB 45 完掘状況



SB 43・SB 44・SB 45 玉類出土状況



S B 43 · S B 44 · S B 47 完掘状况



S B 43~S B 49 土層



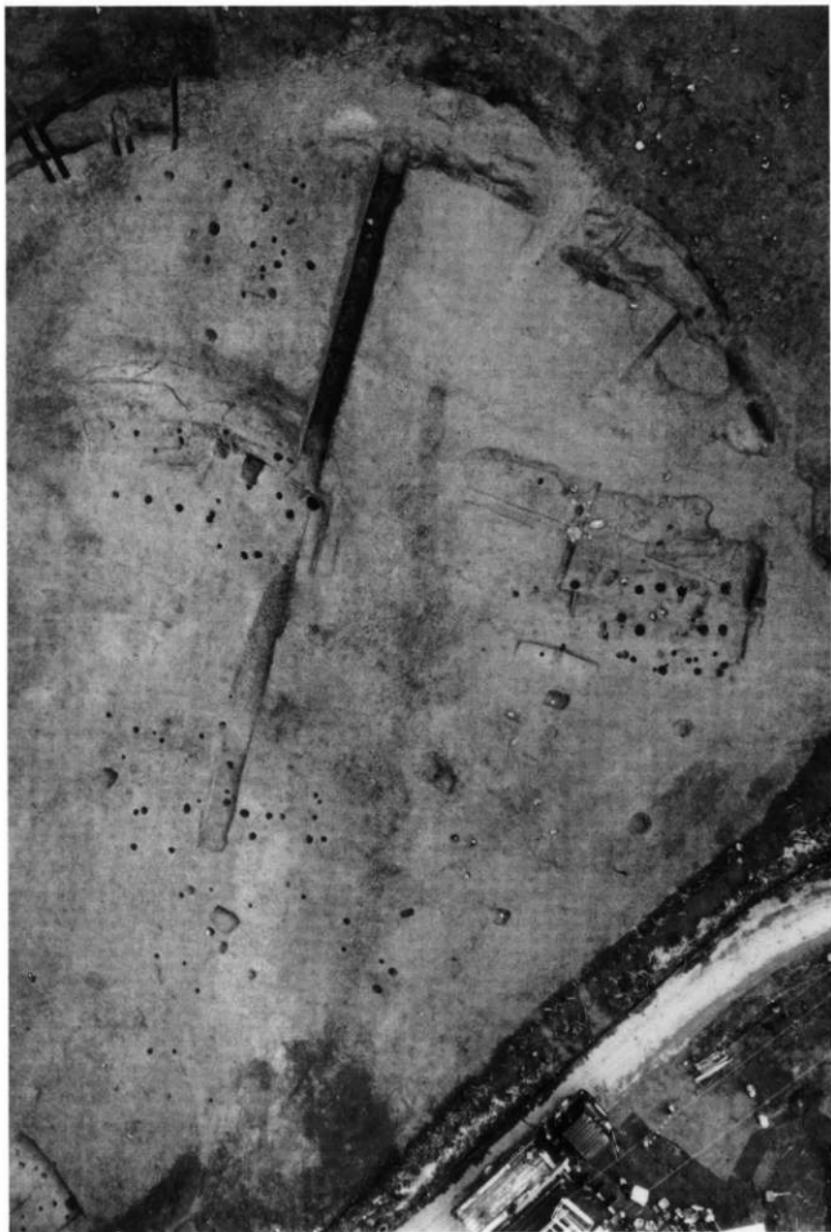
S B 52 完掘状况



東区東側上段ピット群



東区pit242



東区西側 空より



SB41 ピット群上段



S K 01 完掘状況



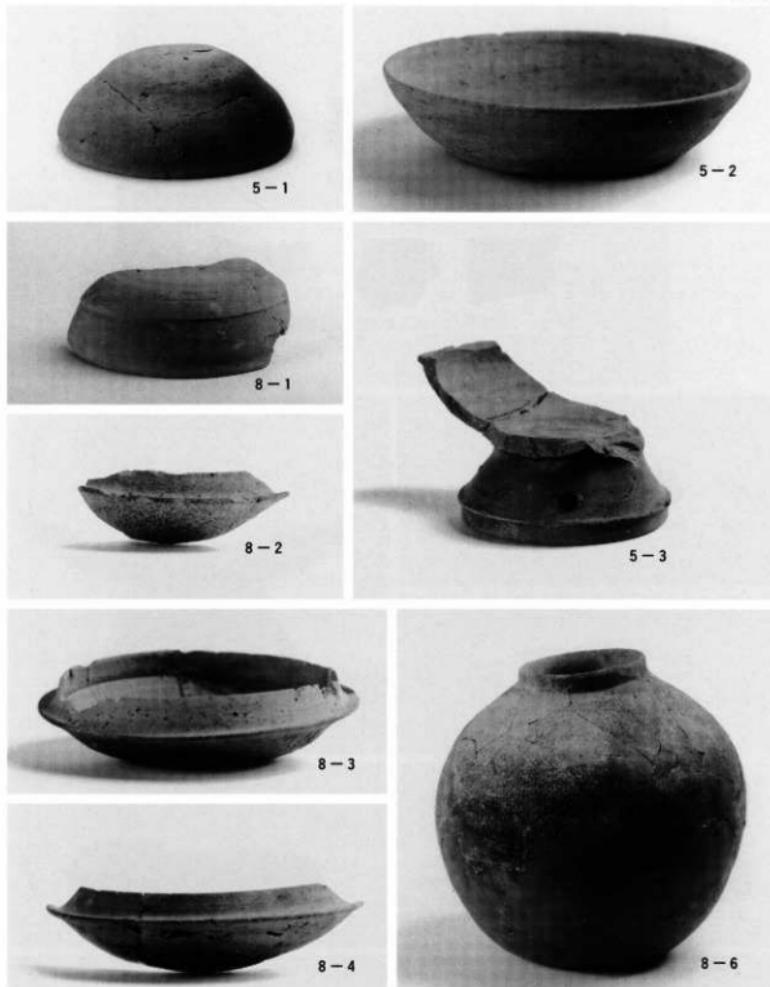
S K 01 土層



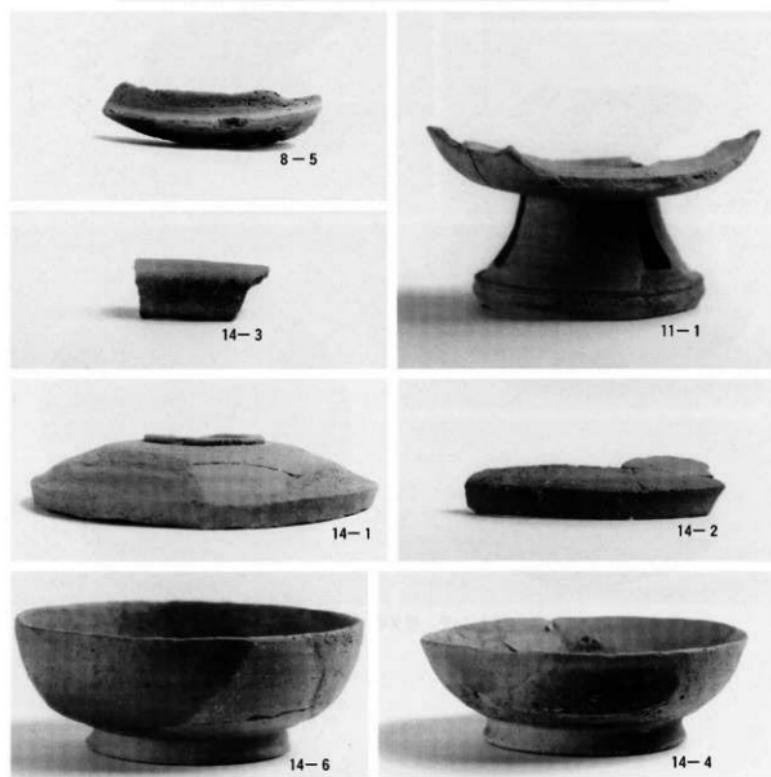
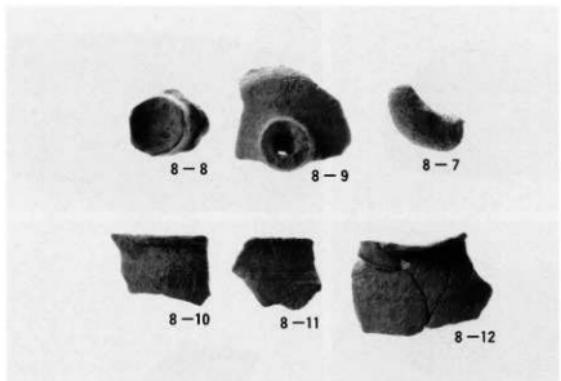
現地説明会



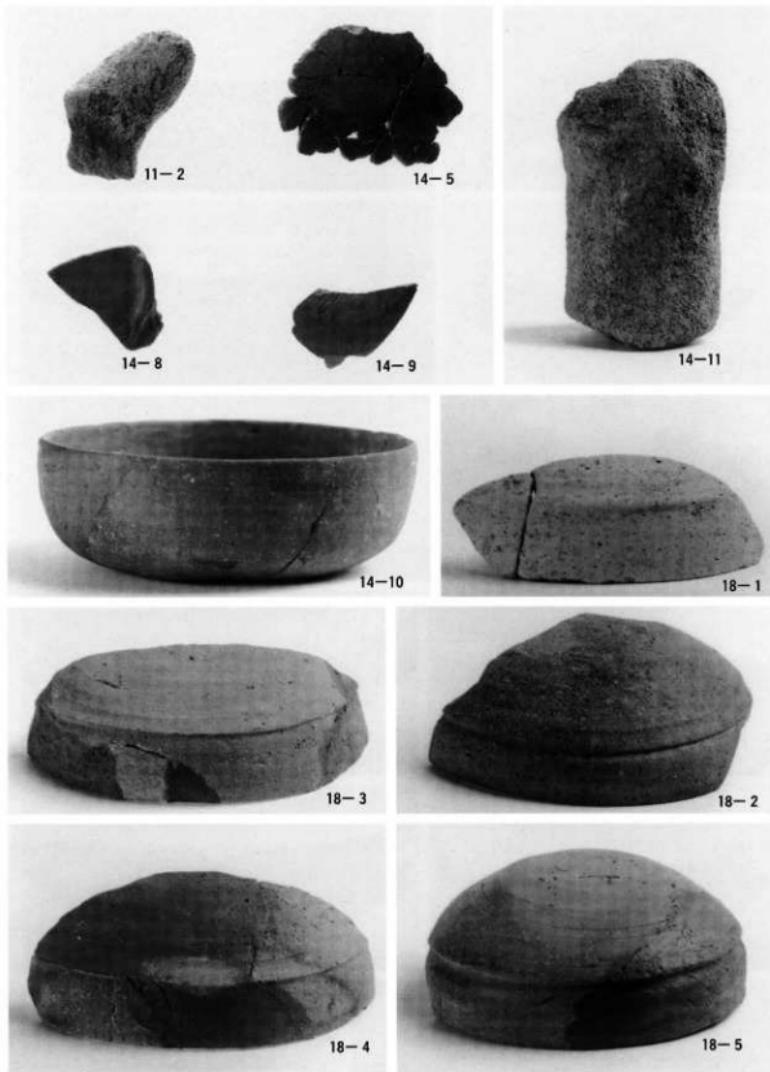
堂床遺跡から宍道湖を望む



トレンチ、SX01 出土土器

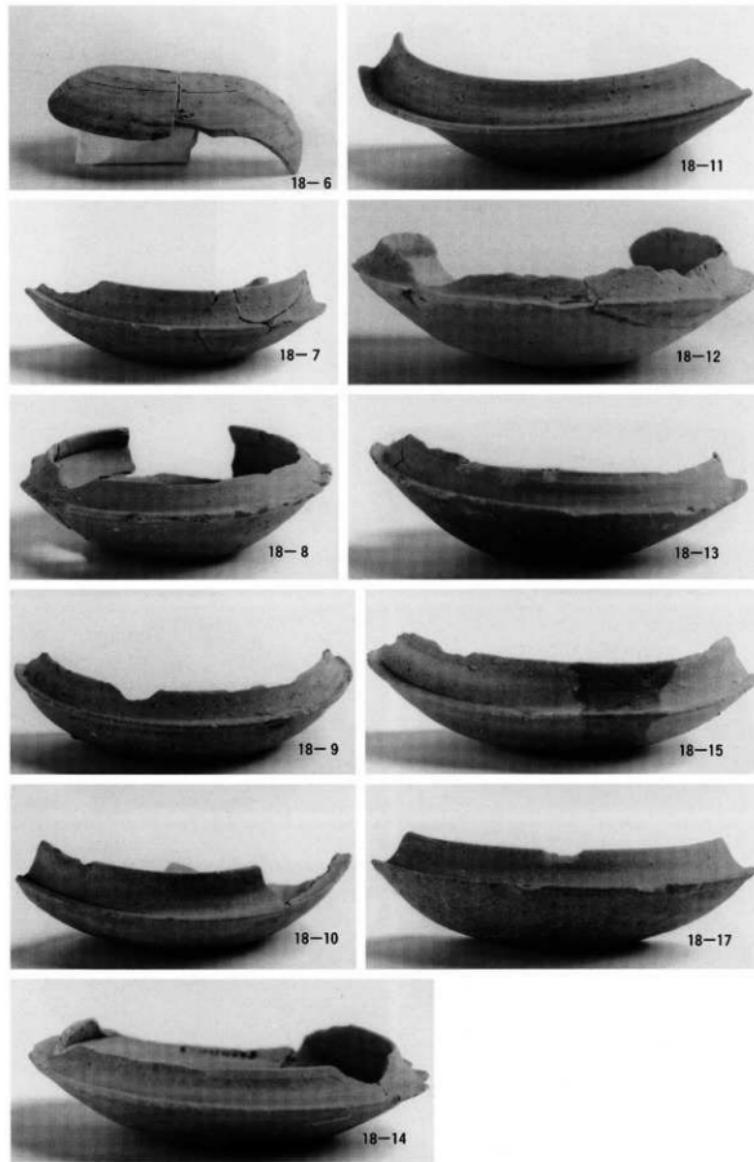


S X01、S B01・02 出土土器

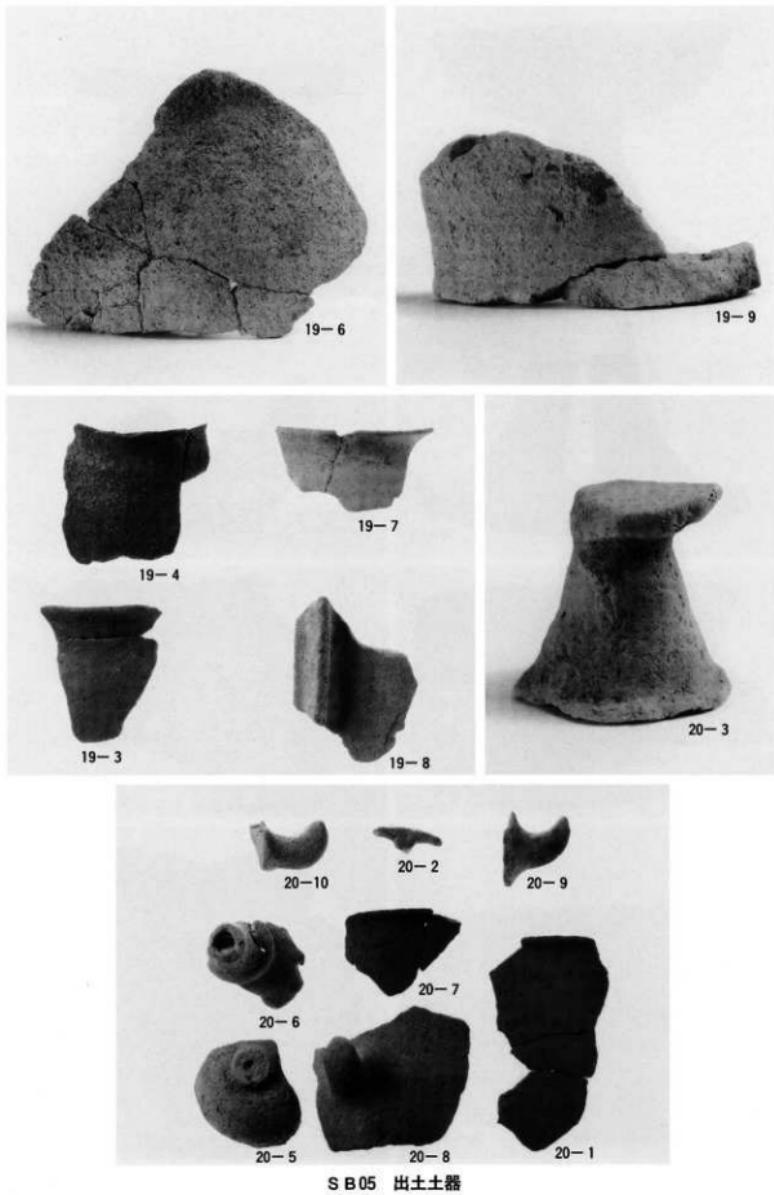


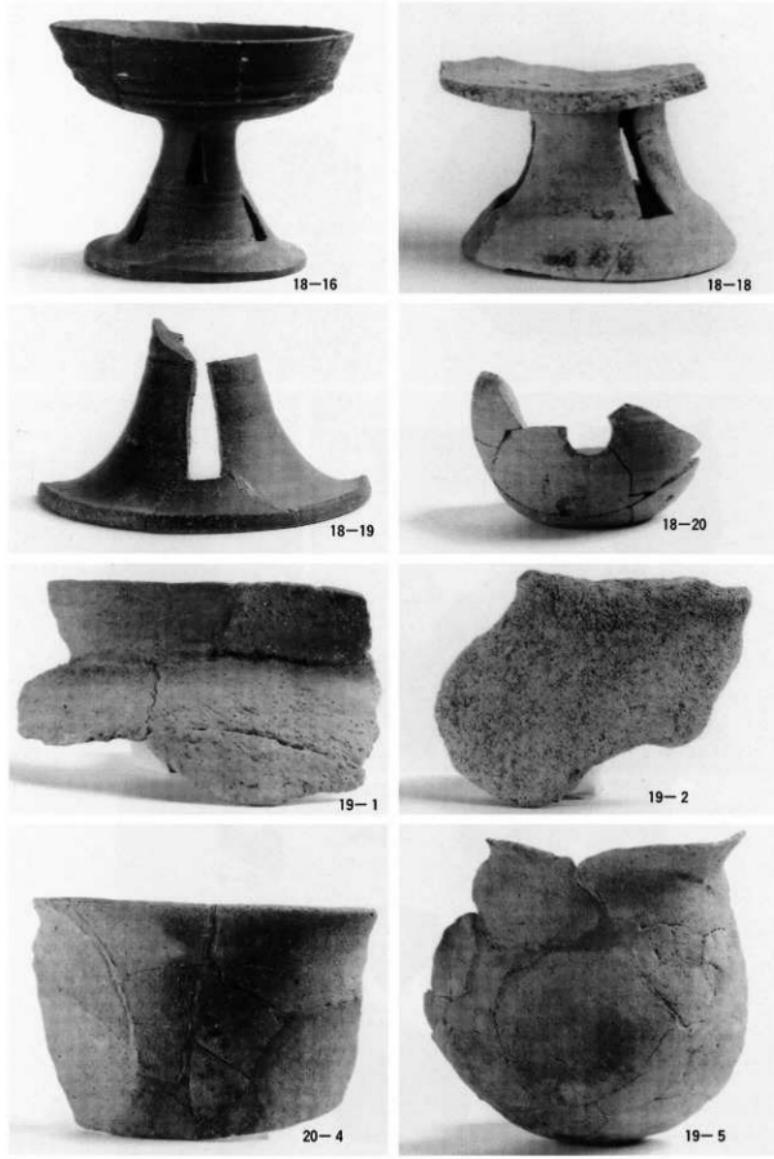
S B 01 • 02 • 04 • 05 出土土器

图版44

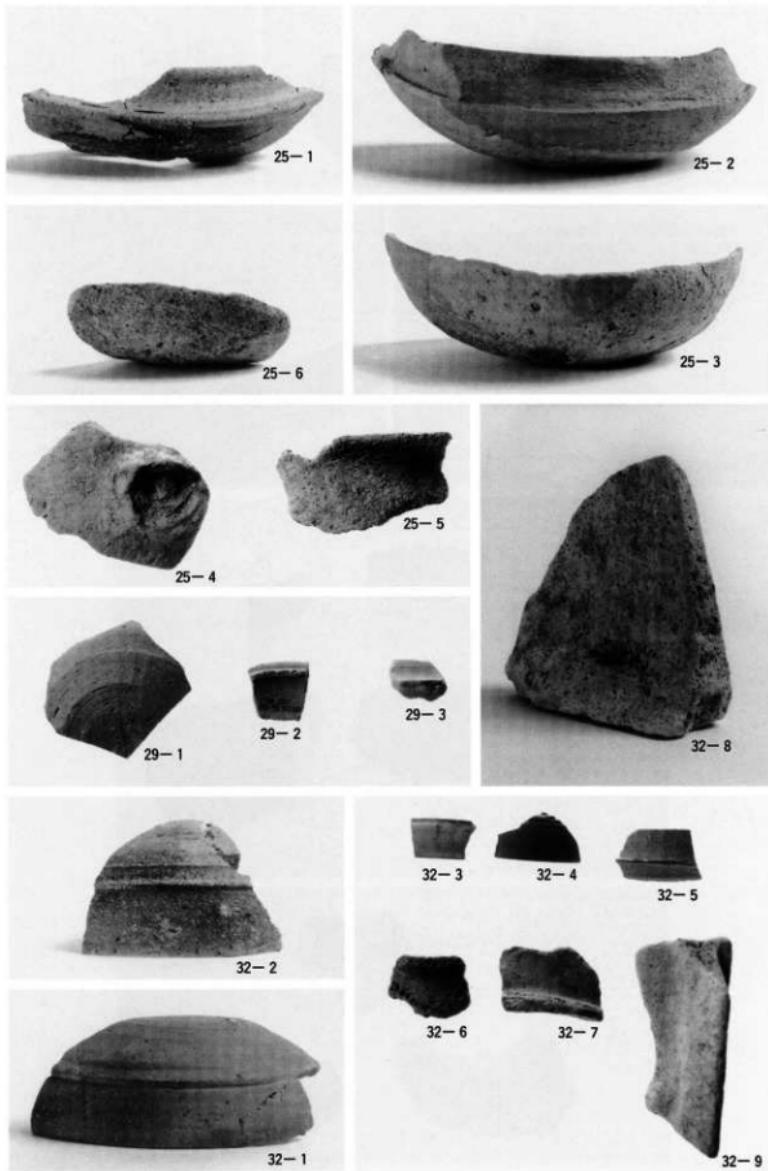


S B05 出土土器



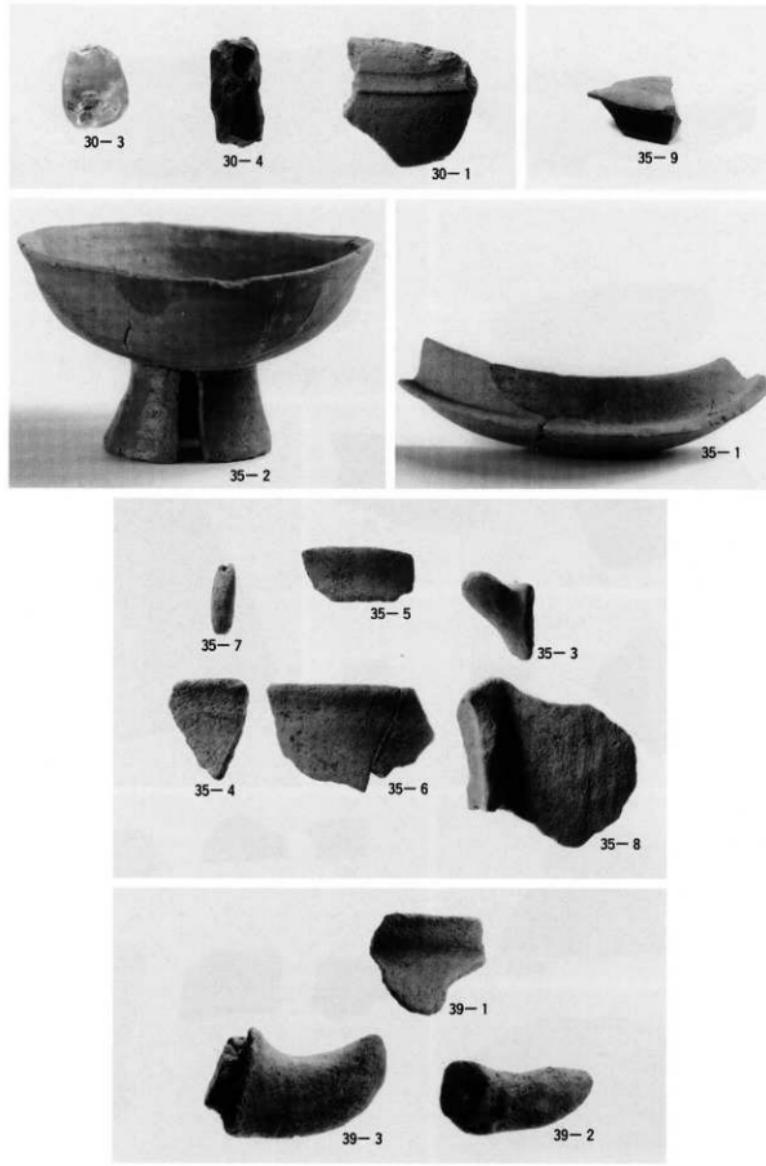


S B 05 出土土器

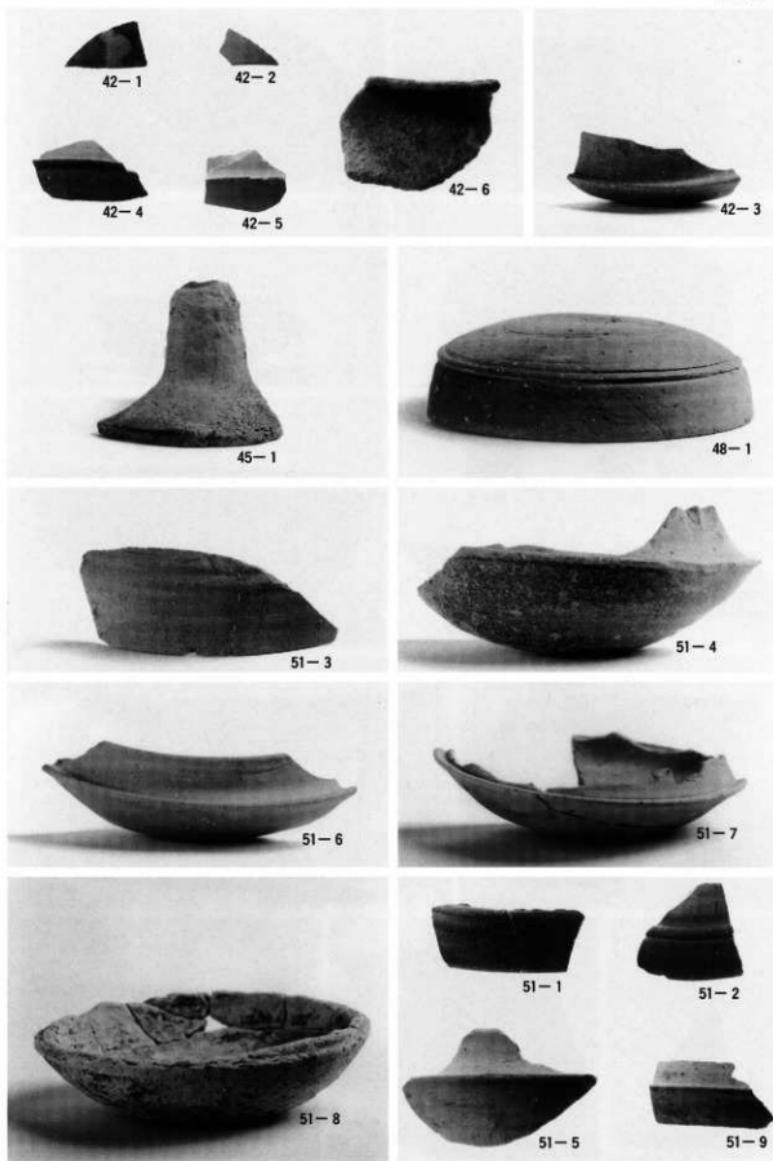


S B 06・07・08 出土土器

図版48



S B 09・10・11 出土土器



S B 12・14・15・17 出土土器